

カプセル大王



「あきとはここで待っててね。お買い物すぐすむから」

お母さんはあきとに百円玉二つにぎらせると弟のかいとのバギーを押して行ってしまいました。

土曜日の午後ですが ショッピングモールのゲームコーナーはひっそりとしています。

「ちえっ、またか」

半年前に弟のかいとが産まれてから お父さんもお母さんもおかいてだけかわいがってあきとはしかられてばかりです。かいとなんてちょっとおすわりしただけで手をたたいてもらえます。

「ぶーぶー」

言いながらふわふわボールをぽいと落とすだけで頭をなでてもらえます。それを片付けるのはあきとです。ちょっと泣いたらすぐだっこです。お父さんも会社から帰ってくるとまずかいとをだっこします。あきとが幼稚園の大きい組でかいてきた絵を見せても前みたいにはめてくれません。一番好きなカプセルヒーローのテレビだってかいとが寝てるとボリューム小さくして静かに見ないといけないのです。

「赤ちゃんはいいよなあ」

あきとは大好きなカプセルヒーローのマシンの前でレッドの変身ポーズを決めました。さびしい時やくやしい時はこれで元気になります。大きくなったら絶対弱い者を守るヒーローになると決めています。

「よし、一番強いレッドを出すぞ。月曜日幼稚園でけんちゃんに見せびらかすんだ」

「カプセルレッド出る！」

と大きな声で言うとあきとはカプセルマシンのレバーを思い切り回しました。

ウイ〜ングワ〜ン

「あれ？」

いつもの半分透明のカプセルと違って虹色に光るカプセルが出てきました。

「ひょっとしてレアアイテムかも！」

あきとはわくわくしてカプセルを開けようとしたのですが固くて開きません。汗が出るほど力を入れました。とつぜんまぶしい光とバーンという音と一緒にカプセルが開きました。

「ムキャキャ〜！わしがカプセル大王じゃ〜！」

二つに割れたカプセルの片側にあきとの親指くらいのネコのようなものが動いています。二本足で立って大きな赤いマントをつけてふんぞりかえっています。

「しゃべるの？電池？でもカプセルヒーローにこんなキャラいたかなあ」

あきとはあっけにとられてそのチビネコをつまもうとしました

「ムキャ〜！おもちゃじゃないわい！」

チビネコはびよんびよん跳びはねましたが、ハッと我に返って咳ばらいをすると前よりももっとふんぞりかえって言いました。

「コホン。礼を言うぞ、地球人の子供よ」

「生きてるの？」

あきとは自分の手の平に乗せてゆっくり見ました。

「わしはカプセル星のカプセル王国の大王じゃ。宇宙探索に出ておったら、この機械の中に紛れ込んでしまい困り果てておったところじゃ」

カプセル大王と名乗ったチビネコはひげと尾をピンと立てるとあきとの肩に乗って耳のそばでもっといばって言いました。

「礼として願いを一つかなえてやろう。なんなりと申せ。ただし十数える間じゃ。ムキャキャキャ〜！」

「何でも!?え〜っ！」

「十、九、八、」

「え、え、え〜っと かいととかわりたい」

あきとは大声で叫びました。

「ムキャキャ〜！お安いご用じゃ」

カプセル大王が小さな毛むくじゃらのうでを一回転させると、虹色のうずまきの光りが押し寄せてきてあきとは飲み込まれました。

あきとはぼお~っとなっていました。自分がバギーの上に座っているのに気がつきました。

「あらかいとちゃんどうしたのかな？」

お母さんがバギーの上からにっこり笑って頭をなでてくれました。こんなにやさしいお母さんを見たのは初めてのよさげな気さえします。

「かいとになってよかった」

あきとはうれしくてバギーの中で手と足をバタバタさせました。

お母さんと買い物を済ませてゲームセンターのところまで戻ってくると激しい鳴き声が聞こえました。カプセルマシンの前であおむけにひっくりかえったかいとが泣き叫んでいます。

「あきと！どうしたの？」

お母さんが顔色を変えてかけよると

「うわ~ん、ぼくなんだかわからないけどお兄ちゃんになっちゃったよ~、うわ~ん」

聞き取りにくい言葉でやっとかいとは話しました。

「なにばかばかしいこと言ってるの！あきとはずっとかいとのおにいちゃんでしょ。つまらないこと言ってるんだったらほっていくわよ」

おかあさんはさっさとバギーを押して行ってしまいます。かいとはふらふらとやっこのことで立ちあがるとお母さんの上着をつかまえました。あきとは

「いい気味だ。今までかいとばかりかわいがられてたんだからな」

バギーに乗ったあきとは大笑いしたい気分でした。

「あきとごはんよ。元気がないけどあきとの大好きなハンバーグよ、おあがりなさい」
かいはキッチンのテーブルの前にすわりましたが、おはしをグーににぎってつきたてているだけです。

「なにやってるの！おぎょうぎの悪いことするんじゃないありません。いらないのなら食べなくていいわ」

おかあさんはお皿をさげてしまいました。

かいはベソベソ泣きながらベビーベッドのそばで寝てしまいました。

「いい気味だなあ、ぼくの気持がわかるだろう」

あきとは笑おうとしましたがおなかですいて力が出ません。

「オギャーフギャー」

「かいたもおなかすいたのね、はいはい」

おかあさんはあきとをだっこすると哺乳瓶を口に入れました。

「ま・ま・まずー、ぼくもハンバーグが食べたいよ」

しかたがないので涙を浮かべながら飲みました。おしっこもしたのですがオムツの中で気もち悪くてたまりません。首の後ろがかゆいのにおかあさんに分かってもらえません。

夜遅くお父さんが帰ってくるとだっこされました。せっかくぐっすり眠っていたのに起こされてお酒の匂いもくさくていやでした。

次の朝八時 かいとはまだ寝ています。

「あきと、日曜日よ。カプセルヒーロー始まるわよ、見ないの？」

おかあさんはテレビのリモコンをかいとに渡そうとしましたがかいとはいやいやをしました。

「ばかっ一番たのしみなテレビなのに！今日はいよいよ敵との決戦なんだぞ」

でもテレビのスイッチは入れられず時間が過ぎていきました。することは何もなくてただまずいミルクとうすい果汁とか飲んで寝ているだけです。

月曜日の朝かいとは着替えが遅いとまたしかられています。

「おにいちゃんのせいだ」

かいとはそういうとベビーベッドのあきとの頭をぽかっとたたきました。でもあきとは泣かずにがまんしました。

お昼前電話がなりました。

受話器を取ったお母さんは真っ青になると あきとをおぶって飛び出しました。タクシーの中でお父さんに携帯電話しています。

「あきとが幼稚園のジャングルジムから落ちたんですって。けんちゃんと変身ごっこをしてて。いつも遊んでるのにね。今病院に向かっているの。おもらしとかもしてたいへんだったみたい。もうどうしちゃったのかしら？ なにかあったらどうしたらいいの」

おかあさんは顔もくしゃくししゃにして泣いています。

車椅子に乗ったあきと、右足にはギブスがはめられています。

お母さんはあきとをおぶってかいとの車椅子を押して病院を出ました。

あきとはかいとがかわいそうでたまらなくなりました。

「かいとごめんね、かいと小さくて弱くてなにもできないんだ。ぼくが守ってあげなくちゃいけないんだ。ぼくこんなじゃヒーローになれないや。なんとか元にもどさなければ、どうしたらいいんだろう。そうだ！」

ちょうどあのショッピングモールの前です。

あ母さんの背中から必死で

「あぶぶ～ぶぶ～」

と かいとに合図を送りました。手をモールの方へ向けました。ぽかんとしていたかいとはやっと分かったようです。

「お母さん ぼくゲームセンターに行きたい！」

かいとは叫びました。お母さんはびっくりして

「こんな時に何言ってるの」

とにらみましたが あきとのあまりにも真剣な様子に

「わかったわ。なにかあるのね、行きましょう」

と車椅子を向けてくれました。

かいとはあのカプセルマシーンの立ちました。二百円を入れて深呼吸をするとありったけの力を出してレバーを回しました。お母さんの背中からあきとも念を込めました。

「ムキャキャキャ～！わしがカプセル大王じゃ～！」

おしまい